



「お客さんが来るのよ、雪絵」

「……………お客？」

本邸の広間での夕餉の席。その頭たる最上座にいないことが、春花は最近週に何度かある。しかし、この宵はちゃんとその顔が見られたことで、腹の底に、夏野菜とは別に納まったもやもやしたモノも僅かながら和らいだ——そう、雪絵が感じていた矢先に、春花はそんなことを言ってきた。

雪絵が視線をやっていたので、春花が手招きし、傍に来て脇に坐った彼女に、何の気もなさそうな顔でそう告げたのだった。

その平静さに、雪絵は僅かながら、春花特有の腹の底に何か備えている時の雰囲気を感じて、慎重に問い返す。

「……誰が来るの？」

「寺崎さん」

春花の口からでた名前に、途端に雪絵の顔が眉を八の字にして、口をへの字にした不機嫌さを隠さない表情になった。

そんな反応に困ったように笑いながら、春花は、

「そんな顔しなくてもいいでしょう。あなたがあまり寺崎さんを好いていないのは知っているけれど、今回は仕事なんだから、我慢してちょうだい」

と手をとってぽんぽんと叩くのだった。

いつも我慢しているのだが……と思うものの、そうされると、それを言っていたずらに春花を困らせることも出来ない。やんわりと春花の手を解くと、笑顔を繕おうと顔を手でほぐしてみせる。

「……仕事って、もうお盆も近いのに、あの人も忙しいものだね」

「そうね。でも、今回相談する件は、実はあの人がこの郷に初めて来た頃より前からあがっていた話なのよ」

「というと？ 仁美の組が西方から受けていたのを、引き継いで本格的に動き

出したってこと？」

「いいわね。あなたも以前より話を読めるようになってきたじゃない」

「……まあ、色々読ませてもらっているのが、少しは役に立っているのかな」

と、雪絵はやや得意そうに頷く。春花はそれに微笑んで返すと、話を続ける。

「そう、掻い摘んでいうと、西方の技術を使った“塔”をね、境界線上に建てたいそうなのよ。それはあの場所に電気が通っていることの延長上、発展的なことでね、この郷にも利点がある、国内の政策の一環なのよ」

「政策……西方の思惑があるってことかな」

「ええ。恐らくどころか、そうでなければ向こうはこの郷に介入してこない。だからでしょうね。郷の内でも、昔ながらの景観が損なわれるのも嫌だということもあるけれど、そういう西方の干渉を疎んじて、色々反対の声があがっていたの」

「反対の声、か」

それはそれで、力のある組の援護を必要としなくては立ち行かない訳だ、と雪絵も得心する。寺崎という外交官が、春花と獅士堂一家と懇意にしてきたその一端——堅実な手口を雪絵は感じた。

「勿論、あの人の外交官としての今の一番の仕事は、その塔の件を進めることなんだろうけれどね……でも雪絵、少し触れておくと、寺崎さんは恐らくこの郷の内政を見守ってくれる方だと思うわ」

「内政を見守る……？ 何それ、西方には内政に干渉したい人たちと、そうじゃない人たち……そういう、えっと、派閥、だっけ……があるということ？」

春花はそれに明確に答えず、冷茶をすすった。

「ともかくね、寺崎さんは悪い人じゃないんだから、雪絵もそんなに邪険な対応をとらないようにしてね、という話よ」

そんなことを言っていた春花の横顔が、瞼の裏にのこり、雪絵は部屋の薄明かりの中で身動きする。

夏の熱気のある夜。雨戸も、襖も開け放たれ、蚊帳に覆われた、その熱気を

## 第四章 太刀の式

---

幾分でも和らげるような昔なじみの工夫をされた、畳み敷きの室内。

刀郷が寝静まるのはそれほど遅くない。しかし、寝床は既に準備されているが、雪絵はまだ小さな蠟燭の灯をつけたまま、布団に横になってぼんやりと考えていた。夏の夜の虫の声は騒々しくも、心地よさを感じ、一日の稽古の余韻に浸るにはお誂え向きだ。それに、先の春花から告げられた話を思うと、安穩と眠りにおちる気にもまだなれなかった。

蠟燭の光に吸い寄せられて、蚊帳の網に時折勢いよく衝突してくる虫を見るときも見て、雪絵は考える。

（春花さんは、あの男と少しは仲良くするように言うけれど、春花さんは私の気もしらないから、そんなことを言うんじゃないかな……）

単純に、自分は春花と一緒に居たいから、その時間を掠め取り、邪魔をするカタチになる寺崎が疎ましいのだと、雪絵はうっすらと理解している。

（嫉妬……、というヤツかもしれないな。私は、寺崎という男が疎ましい。でも、それはそれだけ春花さんのことが好きだということだよな……）

鮮烈で、心ある刀の美。

『華』 のような人——『華』 を躰わす刀技。

心をくれた。名をくれた。

自分を娘とし、家族としてくれた人。

自分を子として、宝と言ってくれた女。

（春花さんの最近の様子とか、一緒にいられないのは、正直不満だ。それに時々課してくる仕事とか、厭なことがないわけじゃあない……けれど）

——嫌いなわけじゃあない。

むしろ、嫌いになる訳がない。

むしろ、大好きだ。

そういう厭なことをするのも、春花も一人の人間であるということだし、そういう事も含めて好きな人との関係のような……最近はそんな風に“好かれるだけ” が人付きあいではないという、嫌われたり邪険にされることも人間関係では自然に生じる——その当たり前さを雪絵は諒解してきている。

## 第四章 太刀の式

---

彼女もこの獅士堂一家の組屋敷に来てから、多くの男衆と生活を共にするうえで、様々な種類の人間と言葉を交わし、そうしたことも学んでいた。

だから、そんな煩雑な感情を起こさせられる言動も、春花を想う気持ちのスパイスだと思える。

(何だか、私は春花さんに恋でもしているみたいだな……いや、恋ってよく分かっている訳ではないけれど)

それは親愛なんだと理解しつつも、そんな冗談のようなことを考えて、独りににまりするようになった自分を知る。

(でも……春花さん……、春花さんかあ……)

時々、雪絵は思う。

自分にとっての坂本春花とは、どういうモノか、と。

漠然と、そしてぽつぽつと思いつく観念はある。

『強い武俠』

『心ある刀の遣い手』

『勇俠にして風格のある頭』

『優しい人』

『寛容な人』

『美しい人』

それらを思い、自分もこんな人に——こんな武俠になりたいと思わされる。坂本春花とは、そういう人だと、雪絵は思っている。

(憧れている……というヤツだね。春花さんは、私の憧れ……。刀も、武俠としても、人としても……)

だから好きなのかな、と得心する。

そうして思うのは、春花の方から好意を表わされているが、自分はまだ、よくよくそれを表わせていないなということ。気恥ずかしいというか、戸惑いがあるというか、もじもじと照れくさくて面と向かって強く言動に出せない——言いたい事や言うべき事が声になってでない感覚とはまた違う——そんな胸の端の何かに引っ掛かって、まだ言えていないことがある自分を、雪絵は自覚す

る。

『母と娘』

不意に言葉が浮かび——それだ、と雪絵は瞳を見開く。

(私を娘と呼んでくれる春花さん。私は、憧れる人でもあるそんな春花さんが、自分のこれまで知らなくて、無かったモノである母となってくれて、それも好きだから.....)

(うーん、私も 『母さん』 って思って、呼んだ方が自然なのかな.....?)

どうにもその一線に対して、不思議な抵抗を雪絵は感じているのだ。

いざ春花のことを 『母』 と呼ぶとなると、何故か心が竦むとでもいうのか.....、雪絵はそうなんとなく思う。

「好きと思えても、母親と思えない.....ってなんだろうね」

声にしてつぶやいてみるも、よく解らない。

しばらく虫の声に耳を委ねてみる。離れは静かで、夏の夜の空気は熱を帯びながら穏やかだ。そんな中でじっと考えてみるが、一向に答えに辿り着かない。

気を紛らせるように、身を返し、また返し布団の上でごろごろと身をよじり、そしてむくりと上半身を起こす。部屋の脇を視る。

蚊帳の中にはいつ如何なる時も抜き、戦えるように、刀が一振り置かれている。若草色の柄紐の刀。この刀も、一年と半分の間で結構な数の太刀合いを共にし、今や自分の刀だと思える。

(自分の刀.....か)

その若草色の刀を手に取り、まじまじと拵えを見遣り、思う。

思い出す。

この刀を、春花が与えてくれた刻のことを——。

(あの事の後で、尚も私が刀を振るっていく、と言ったら、春花さんはならこの組で心を一から持って、刀の道を行きなさい——と、そう言ってこの刀をくれたんだった)

若草——芽生え、新緑、新しく育つ命。

——でも。と雪絵は、思考の枝葉が別に繋がるのを感じる。

## 第四章 太刀の式

---

(じゃあ、私のあの刻から以降の、春花さんに憧れてやっていこうと思えた刀って……、なんなんだろう)

雪絵は手にした刀の柄に力を込めて、その刀身を鞘から半身晒す。

ほの暗い中にも、真鍮の刃独特のキラリとした、また艶やかなぬめりも帯びた彩が瞳に映る。

「……………」

しばし刀身を見詰めて、ふと首を巡らせる。この離れの、春花の部屋のある方だ。

今はもう、彼女も自室に戻っているだろうか。それとも、明日の来客の準備で、女中や中間たちといくらか打ち合わせでもしているだろうか。けれど、春花の顔を思い浮かべて、考えるのだ。

(私のこれからの刀……。それは、私が春花さんに視たモノを追い求めることか……)

それは、春花を慕い、憧れる自分が、春花のような武侠になること。そして、ならば同時に、この獅士堂の組の頭になることも目指すべきことではないのか、と思う。

(けど……この組の頭になるのは、正直どちらでもいい。春花さんの期待に応えるのは、心地いいかもしれないけれど、私の刀の目標ではない気がするし)

人を率いて、土地や民を治める刀というのが、想像がつかない雪絵。それに、人のうえに立つというのも、それほど食指が動かない。そりゃあ、春花のように烈侠にびしりとした態度を見せるのは恰好がいいとは思うが。

「……だから、私はつまりは、春花さんのような刀技を体現出来ればいい」

あの 『華』 のように……。

そうして、また考える。

(じゃあ、春花さんの刀技って、なんだろう？ 春花さんはどうして、あんなに美しく刀を振るえるんだろう？ 何であんなに、相手への尊意にあふれ、人を想い……心ある刀に視えるんだろう……)

そこが分からないと、目標にして目指すものにも、筋道というのが照らし出

## 第四章 太刀の式

---

されないのでは？ 雪絵は、うーん、と唸り刀を持ったまま天井を見上げる。

そして、あまり空気にさらしては難かな、と刀身を鞘に戻す。その刀を元のように畳の上に置くと、蚊帳から出て文机に向かう。机には西方で作られ郷に仕入れられたノートと鉛筆が置かれている。鉛筆は削ってあり、普段から筆記具を使って書いているままに、適当に置かれている。その鉛筆を手に取り、少しぎこちない筆運びだが、雪絵は何かしらを書き記す。

（私の刀……、これからの私の刀は、春花さんに倣うものだ。なら、その春花さんの刀技に秘められたモノを知ること、それがキモだ……と）

思いついたことを書き記し、読み返す。

春花は、こうした手法で自分の意識や意思を明確にしてみるのも一つの手だと教えてくれた。春花は実際にそうしてメモ書きをしていることがあるようだが、そういえば、左馬ノ介あたりがそういうことをしているのはあまり記憶にない。

思い返してみるに、せいぜいが、かつての任務時に必要事項を地図の脇に添え書きしてメンバーに見せていたくらいだ（そのメモはほぼ全て実働前に焼き捨てていたが）。

以前にそういう話をしたら、彼は紙に書いてのこさなくても、まとまったことは頭で把握しているから、大体問題ないという話だった。年下の弟に出来ることを自分がしないというのは、少し癪ではあるが、左馬ノ介は人には慣れや適正があるから、人それぞれでいいですよ、と言っていた。

そんな義弟の気遣いを感じながら、だから、人それぞれのやり方は、その人に合っさえいればいいのだな、と雪絵も自分にやり易さを感じた手記で考えをまとめるようになっていた。

そうした事情はともあれ、雪絵は書き記し読み直した文面に、ふん、と鼻から息を吐く。

「目指すべき、刀の在り方……。よし」

そして、ノートを閉じ鉛筆を置くと、また蚊帳の中に這っていき若草色の刀を手にした。そして、そのまま部屋から出て、履物に足を通し、庭に降り立

つ。刀をすらりと抜き、夏の熱気を孕んだ空気に刃を晒すと、その夜気をヒュンッ！ と裂いた。

明日は、どうにも気に入らない人物が来る。

しかし、それでも自分のやるべき事は、やはりこの刀で顕わすのだと思うと、手に力がこもる。

周囲のもやりとした熱気も、命をあらんばかりに載せる虫の音も、自分の心の端に引っ掛かりもやもやしたモノも、こうしているうちは斬り払えるような気がするのだった。

### 4

今回の寺崎の仕事は、お盆の帰省前の刀郷での最後の仕事だった。これをひと段落させれば、その諸々の手続きで、しばらくは入郷に間があくことになる、と彼は口にしていた。

「塔を建てる、というお話でしたが、その塔は、具体的にどの程度のモノになるのでしょうか、寺崎さん」

仕事の件の挨拶と、大まかな説明と相談に獅土堂一家の屋敷を訪れた寺崎は、客間で春花や白峰たちと座し、会話をしていた。本邸の広い客間で卓を囲んで春花が問いかけるのを、同席していた雪絵は不機嫌が面に出ないように気を張りながら、（それが隠させているかはともかく）聞くともなく聞いていた。

「物見の塔というだけでもないにしても、西方がわざわざ建てたいと言うのだ。十メートルや二十メートルのモノでもあるまい」

普段通りの低く落ち着きのある声で白峰が言うのに、寺崎は少しはにかんで、実は、と持ち込んでいた鞆から何やら取り出す。

「今回の建設予定の塔に関する図面です」

寺崎は、失礼します、と机に紙を広げる。

その新進的な図面がやや衝撃的だったようで、一同が目を皿のようにして視

入る。

「西方の都心には、通天閣という塔がありました。この塔は今から十年以上前に損失しており、その再建の声が多くの人々よりあがっておりました。しかし、その二代目を建てるのなら、どうせならば、同じ国の一部である刀郷に寄贈するカタチで建てればどうかという話になったのです」

「それは、東西の親交と親密の証ととってもいいのかしらね」

「ははは。坂本さんは相変わらず手厳しい。はっきりとは言わないが、そうですね.....すべてを委ねられるような信に値するモノではないでしょう。そこは、私のような立場の人間から見ても否定できません」

「成程」

春花と白峰が頷き、座敷の入り口で控えている左馬ノ介も得心いったように内心で頷く。

「で、この塔なのですが.....」

寺崎は話題を戻して、凶面に指を這わせる。

「初代通天閣に倣って、百メートル級を予定させていただいております」

「百メートル.....」

「そんなモノがこの郷に立つとなると、さぞや最初は戸惑いのある人も多いのは.....確かね」

白峰が顎をさすり、春花が瞼を伏せる。

雪絵は百メートルという数字自体は分かるのだが、そえが土地に立つ場合には、実際にどのようなになるかがイマイチ想像がつかない。

「左馬ノ介、江戸城の富士見櫓はどのくらいの高さだったかわかるか？」

「.....標高二十メートル強の地に、石垣と櫓で三十メートルといったところかと」

かつて江戸で抜きんでて高かったという江戸城天守閣.....その後継としての高さを誇る富士見櫓でも、五十メートルくらいの高さ。西方の提示する新たな塔は、その倍の高さがあることになる。

雪絵も、富士見櫓くらいなら視たことがある。あれよりも倍は天に突き出る

## 第四章 太刀の式

---

ことになる塔……想像すると、確かに人によっては戸惑いもあるかもしれない。

と、雪絵もそんな風に納得して、しかし春花の言うような郷の民がどう思うか——どういう気持ちを抱くか、ということに対して、想像は出来ても心が動かない。どうにかなるのでは、という軽い認識だった。

それよりも、今はすぐ三メートルもない距離にいる、白いシャツにオールバックの髪型の男の方が気になって仕方がなかった。

(気になるというか、気に障るんだよ……！)

「この塔は、用途してはどのようなになるのか？ 寺崎殿」

「はい。この塔は、初代通天閣の機能を向上、補填させ、電波塔としての側面とともに、展望台として、観光の名所としての役目を持たせるつもりです」

ふむ。と白峰は事前に簡単な話を聞いていたにしても、改めて西方が建てたいという塔の実情を確認して考える。

「電波塔——と聞いて、私たちこの郷の者には、その役目や使い道がよく分からないところですね。決定の権限のある私たちのような者以外にも、これを周知のこととする必要もあるでしょう」

「うむ。堅気の民衆が、そのような巨大な、富士山のようにどこからでも天に向かってそびえる塔が視えることで、違和感を抱くのもそうだが、その電波塔を広める、という点について、恐怖心やともすれば風聞が立って、今のような反対派の動きが強まってもいるのだからな」

春花も白峰も同じことを考えていたようだ。そして、そのことを口にすることで、現状そのことを理解しているか怪しい雪絵に、聴こえるようにすることで教えるような口ぶりでもあった。

(なるほど。それで境界線付近や、東西のシマで反対派がぼつぼつと興っているわけか)

ん……とすると、と雪絵はひとつの閃きを得て、今この場にいる寺崎と、自分たち獅子堂の組員の『仕事』について、ある予想が立った。

「で、その建設予定地は、霞が関から港に向かった辺りの……」

「虎ノ門と東麻布の間です——あの辺りが境界線上で開けており、物資の搬

## 第四章 太刀の式

---

入に港が近く、私たち西方外務官邸の便もあり、素晴らしい条件で、清家の組と青刃の組より認めさせてい頂いております。もちろん、この二十ヶ月の間で、坂本さんの獅士堂の組にも」

「そうですね。しかし、寺崎さん。反対されているのは、堅気の不安からだけではないでしょう。あちらの方への話はどうなっております？」

「そうだな。東の水を承知させねば、建設中の妨害は必至だ」

「はい。それは私の副官と秘書団が地道に交渉して、先日出向いて一応了解を得てきました」

春花と白峰は感心して寺崎を見遣る。

「よく取り付けましたね」

「はい。当初は、獅士堂側と密にしている私が直截出向くと、さすがに波風が立つので、間接的に話をさせて頂いていたのですが、最後は直に顔を見せなければ承認しない、と言われまして」

「出向いたのですか……」

頷く寺崎。春花は瞳を丸くして、白峰は楽しそうに口の端を持ち上げた。雪絵も癪だが、ここは感心した。

左馬ノ介は、よく生きて戻ったものだ、と思ったが、それはこの場の皆の思う処だったようで、寺崎は苦笑いをして頭を搔いた。

「しかし、私は……いえ、時勢はよい風向きだったということかもしれません。向こうの組の上の方の人物が、こう言ってくれたのです。『組のことよりも、郷の、国のことを考えよう』 と。それで現頭首も承知してくたのです」

「上の人物……か。幹部か、四聖か……」

「そうね……」

組の頭と大幹部が、仇敵の中の人物に対して思いを馳せている脇で、左馬ノ介はしかし考える。それはだが、電波塔建設の件で妥協しただけで、直截的にこちらとの関係には影響しない向きの方が、今現在圧倒的に強いのだろう——と。

このことで、辰ノ神側に気を許すことは、春花たちとしてもないだろうとは

思う。

そして、次に来るのは、やはり……と雪絵が内心で想像していたのと同様の予想を、左馬ノ介も確信した。

「それで、私たち外務官と、建設業者やスポンサーは、現地に赴きたく思っております。今回、獅士堂一家の皆様には、その護衛を協力していただきたく思います」

寺崎も、この郷での立ち回りや心得に明るくなって来ている。実際は、東西の総元締め承認の降りたうえでの建設に関わる行動ならば、安全は保障されているようなものだ。しかし、ここは無頼の刀の徒が闊歩する土地。いつ如何なる刃傷沙汰が巻き起こり、立場的に郷に縁がなく、無辜の民である西方の人間であろうとそれに巻き込まれないという保証はないのだ。用心に越したことは無いということである。

その言葉に、やっぱりか、と雪絵は口の中で舌打ちをした。左馬ノ介はそんな雪絵の横顔を心配そうに見つめていた。

春花は雪絵の様子に構う所なく、承知しました、と頷いた。

「その護衛は……、まず、そちらの視察に参る方々の人数は如何ほどですか？」

「今のところ十名程を予定しております。それより増える可能性もありますが」

「……ふむ、では、その護衛は、余裕を持たせても我が組の小隊3つで足りるでしょう。加えて青刃のシマからも一、二隊出してもらいましょう。それでよろしいかしら」

「ありがとうございます」

そして、と春花は手の平を出して、雪絵を示した。

「その護衛団の隊長は、この子に任せます」

一瞬で、白峰が咳込み、左馬ノ介が目を見開き、雪絵が差し出された春花の手を視て茫然と声を漏らした。

「……………は？」

……続く。